

栗本 薫

朝日のあたる家
I



栗本 薫
朝日のあたる家
I

光風社出版

朝日のあたる家 I

昭和六十二年十一月五日 印刷
昭和六十二年十一月十日 発行

定価 一三〇〇円

著者 栗 本 薫

発行者 深 見 兵 吉

発行所 光 風 社 出版

東京都文京区関口一三三二四

郵便番号一一二

電話番号〇三(二〇四)二四四一

FAX 〇三(二〇四)二四四二

振替東京八一二九一三

印刷 大 盛 印 刷

製本 越 後 堂 製 本

◎乱丁、落丁の場合はお取り替えします

©Kaoru Kurimoto 1988

Printed in Japan

ISBN4-87519-342-4 C0093

朝日のあたる家

I

—

目

次

第二章

第一章

189

7

装幀——坂本勝彦

朝日のあたる家 I

第一章

1

朝はいつもけだるかった。生まれたときから、ずっとそうだったような気がする。少なくとも、少年のときくらい、朝の光をあびてさわやかにはねおきたことなど一度もなかった。朝を新しい一日のはじまりと、心はずむ思いでうけとめたこともない。ことにこの数年、しだいにそのけだるさは昂じてくるように思われる。

（また、一日がはじまるのか）

（まだ生きていたのか。まだ、生きてゆかなくてはならないのか）

今日は何をして、何を着て、誰と会い、どこへ行って——それらすべてが透にはあまりにもひとつひとつ、重たく面倒くさいのだ。低血圧なのだろうと、いつもかれはけだるく考える。たとえ、その朝とというのが、ひるの一時をすぎているにしても。

世の中の人間というのは、なぜみんな、あんなに早くから元気に起きて働いたり、動きまわったりで

きるのか。それが、かれにはふしぎだった。世の中の人間は、すべて、かれの何倍もエネルギーで、忙しく、力と生のよろこびとさやかな希望とをあたりにはねちらかしているように見える。

(どうして、他の連中のように楽に生きてゆかれないのだろう)

起きぬけの煙草をとろうと、のばした手が、冷んやりするすべつこいものにふれた。瞬間のとまどいがある。

(ゆうべは——)

誰と寝たのだったか。島津か、雪子か、亜美か、それとも全然ちがう誰かか。島津ではなかった。K TVの看板プロデューサーである島津正彦は、いまロケのために沖繩へいつている。

朝倉雪子でもなかった。彼女と、夜を共にしたことはないのだ。彼女はともかく名家の美しい奥方であり、ひるま、何をしようと、夜は貞淑な妻として朝倉樹三郎のもとへ帰ってゆくのだから。

では亜美だ。ゆうべ、六本木で待ちあわせ、ディスコへいったのだった。ゆるやかに記憶が戻ってくる。はたして、となりの枕の上にひろがっているのは朝倉亜美の、きれいに染めた栗色の長いつややかな髪だった。

その髪の手が波うち、むくりと白いなめらかな二つの岩のように肩があらわれた。

「う……ん、今何時」

「二時少し前」

「え？ うわ、大変。本読みに遅刻しちゃったわ」

亜美はやにわにとびおきた。ディスコを三軒、クラブをひとつ、わたり歩き、さわぎまくって、揚句あげがたに帰ってさんざんたわむれて、七時すぎに寝たのに、十九歳という年齢は、どんな頽廃も、けだるさも、うけつけぬかのようだ。

「ひどい、起こしてっていったのに——いうだけムダかあ。シャワーかりるわ」

「だめ」

「なんでよお」

「おれが使つてから」

「ひどーい、急いでののよ。お願い、怒られちゃう」

「どうせもともと評判悪いんじゃないか。時間も守らない、ふてくされの突っ張り新人女優。別にいまださら焦る理由もないさ。みんな待つてくれるよ。お前さんの悪口を云いながら」

「ひどいんだから、もう。今日誰といっしょか知ってるの？ 高木信介よ。うるさいんだから、もう

——なんで、先使っちゃいけないの、ケチ」

「文句があるんなら——」

透はかるく、骨ばった肩を動かして、帰れ、というジェスチュアをした。

「また、それだ」

「承知の上だろ。おれが、うるさいのは」

「わかったわよ。早くしてよ」

「起きぬけにゆっくりシャワーをあびるのが趣味なんだよ」

「にやりとしてみせて、バスルームへ入ろうとする背なかに、

「もう、意地悪！」

枕がとんできて、ドアにあたつてはねかえつておちた。

湯の栓をひねり、もうもうと湯気の立ちはじめるなかで、バス・タブの満ちるのを待ちながら、かれは洗面所の大きな鏡をものうく見つめた。

そこにうつっているのは、一人のジゴロの肖像である。森田透、三十三歳——もと歌手、GSの人気スターくずれ、やせて不健康な、ジゴロのからだつき、青白いつやのない肌、なかなか長い脚とジーンズが27インチの腰。

やせた首の上にのっている顔を、かれ自身としては、前より、はるかに好きになっていた。前——二十代のなかばをすぎるくらいまでは、あまりにも、それは、ぴりぴりとむき出しの神経のかほそいふると、いつも世の中すべてにむかつてとびかろうと身がまえている、追いつめられたねずみの、狂おしいあがきをあからさまにたたえていた。そのころは非常な美貌だといわれたし、見るからに女性的な感じがしたものだ。ハーフのように白い肌と病的にセクシーな感じ、限のある暗い目もと、栗色の髪。

いまのかれは、なかなかわるくない、とそこからのつきあいである島津正彦も認めている。島津というのはまた、おそろしく気むずかしい美学の持ち主なのだが——湯氣にくもりはじめた鏡にうつるのは、生と世の中のすべてに倦みはてたような、皮肉っぽい、いくぶん面白がっているような、やせてするどい端麗な男の顔である。どうやらどこか島津当人とも共通したものがある——すでに世の中をおりてしまつて、斜に見ているものの一種のおだやかさと興味、諦観と奇妙なしたたかさ。

（あなたは、今の方がずっとセクシーだよ。少なくとも、五年前よりや、いい感じだと思ふね）

島津の云うとおり、そのやせて皮肉な顔は前の《レックス》のスター《トミー》の面影をまったく失つてから、むしろかえつて男としての色気を加えた。以前のかれなら、美青年好みの男たちとあまりに男っぽいものには恐怖心を抱く未成熟な少女たちをこそひきつけたにしても、朝倉雪子のようなタイプの女性や、朝倉亜美にとつて興味ある存在ではなかっただろう。雪子は人間的に弱いところのある男を嫌うし、亜美はまた、きわめてはつきりした娘で、独自の美意識に叶わぬ男は一切よせつけなかった。

奇妙なものだ——湯に体を浸しながら、透の想念はあらぬかたへさまよい出ている。なんとか、うか

びあがろうともがいていたときには、体は、もがけばもがくほど沈んでいった。何もかも、ふいと思いきつて、身を投げ出すと、ふつと体はかるく浮かんでゆく。

(というより、おれのこれは、生きていとはいえないのかもしれないけど)

しかし、何であれ、少しでも生きるのが楽になるのはいいいことだった。かれの顔に、このごろ感じられる明るさのきざしのようなものは、たぶんそのせいだったのだろう。

「結婚しようといったら、お前さん、どんな顔、する？」

タオルでからだをふきながら出てきて、唐突にいった透を、十四歳年下の娘は、目を猫のように光らせて見た。

「それ本気？」

「かもね」

「いや」

「ご挨拶だね」

「だって——あなたはわたしより先に死ぬもの。未亡人いやよ」

「なるほどね。十四は、ちがすぎるってわけ」

「そうじゃないよ」

生意氣と乱暴な口で売り出しの新人女優は、眉をよせた。

「あなたって、長生きしそうもないもん。——シャワーもういいんでしょうね」

ひらりと、敏捷な若鹿のように、素裸のからだが見野を横切つて消えた。

バスローブを羽織つただけで、カップにブラック・コーヒーを注いでもち、マンションの七階の窓に寄つて、透はぼんやりと外を眺めた。視野のまんなかを横切つて、高速道路が走っている。林立するビ

ル、くすんだ木々、うぐめきまわる虫のような車の群。

灰色の十一月のひるさがり、ひたすらだるさなどに浸るいとまもなく、世界は動きつづけているのだから。いそがしく、注文をとり、何かをつくり、運び、売り、話し、食べ――

(いまここで世界が滅びたらどうだろう)

大地震か、頭上から音もなくふってくる、核爆弾で、ものみなすべてがくずれおち、瓦礫と化してゆく光景を、透は想像した。そしていくぶんぞつとした。それがあまりに、快いことに思われたからである。

(なんと楽だろう、そうしたら)

あんた、まだ、死にたいのかい――皮肉な島津の声がきこえてくるようだった。かすかに笑って、透は二本目の煙草に火をつけた。バス・ルームからは、若々しいはりきった歌声が、水音に混ってきこえてくる。ガラスの向こうの灰色の世界は、音のない書割りのように凍ってよどんでいた。

「どこへ行くんだ？」

「きいてなかったのね。――TVTVよ」

「送ってほしい？」

「私に運転させてくれたらね」

「なぜ？」

「死にたくないもん」

朝倉亜美は、白いセーターに白いコールテンのパンツ、白いフードつきのコート、白いブーツ、と白づくめで、マンションの玄関に立っていた。

「まるで、雪兎だ」

「はやってんのよ」

透は黒いスウェードのスタンド・カラーのシャツの上から、ふわりとコートをひっかけた。この贅沢なマンションをひるさがりに、赤のBMWで出てゆくこの妙な二人連れは、ひと目にどううつるのだろう。恋人どうしには年がはなれすぎ、親子には近すぎる。兄妹にしては似ていない。愛人を囲うパトロンの透には透には貫祿がないし、ジゴロをつれたマダムは亜美が役不足だ。

結局、BMWは亜美が運転してゆくことになった。透は運転が得意でない。それは本人も認めている。免許をとったのもおそかったし、とった動機も不純だった。かれの知っていたある男が、何より車を愛していたからなのだ。

あんたはとにかくアクセルとブレーキをふみまちがえるからね、と島津はいう。それは、透にとつて根源的なことばであった。透はいつも進むべきときに退き、退くべきときにつき進んでしまうのだった。「もうちよっと、目立たねエ車にすりゃいいのになア」

サンガラスをかけた雪兎は、乱暴にタイヤを鳴らしながら男のように云う。

「赤のBMWだって——なぜそう看板しょって歩きたいわけ？　ダサイわよそんなの。あたしなんて

「親父のグロリアだろ」

「知ってんのか」

「白手袋の運転手がいる奴はいいけど、自分で黒いでかい車をこるがすなんぞ、まっぴらだね」

「いっちょ前の口、きくじゃない。まるで、いっぱしのドライバーみたいに」

考えてみると亜美と透の関係というのも、ずいぶん奇妙だった。十九歳と三十三歳——誰が考えても、

中年の男が若い娘にのほせて追いかけまわし、金をつかっている図である。だが、じつさいには、金を出すのはいつも十九の小娘であり、連絡してくるのも亜美である。そのことで亜美はしょっちゅういやみをいうが、そのくせ、内心では、自分のほうが能動的に出ているのだ、ということに、ひそかに満足を感じているらしい。

「あたし、一発当てててめえの金が入ってきたら、あんたのこと囲いたいなあ」

「馬鹿云うんじゃないよ、お嬢さん」

「本気よ。ママだって、やってんじゃないの」

「おれはあんたのママの金で食ってんじゃないよ」

「じゃママの出している親父の金よ。どっちだって、同じことさ。ばかやろう！」

目のまえをすつとばしていった強引な右折車に黄色い罵声をあげせかけて、亜美はカーラジオのスイツチを入れた。陽気な音楽が流れ出した。

「このBMWだつてさ。誰のよ」

「ばか」

「どうせ、あたいは、小便可さい小娘だよ——やっぱし、結婚しようか」

「いやだね。さつき、断られた」

「ふん」

亜美は六本木の、TV局のスタジオの前で車をとめた。

「じゃー、ね」

「ああ」

「今夜電話していい」